

間伐材で作られた山小屋風の大型遊具 ドリームハウスが化粧直し 完成！



初代の「ドリームハウス」は、開園2年目の2002年9月に完成した。高島市の澤田純三さんの山林から切り出した間伐材を有効活用し、草津市の大工・草川作一さんの手で「あいあいの森」の中に作られた。その際、自然にこだわって、木材の着色や防腐処理を控えめにしてもらった。そのためか数年もするとあちこちに腐食が生じるようになった。

そこで、「開園10周年記念事業」の33項目の一つとして、「ドリームハウスの大規模補修工事」を行った。腐食部分を新しい間伐材と取り換える工事を再び草川さん依頼した。

初めは改修工事のつもりだったが、いざ着手してみると、建設から8年を経たドリームハウスの腐食が意外と進んでいた。まだ腐食していない部分も、そのまま使える部分は少なく、間伐材部分は全面取り換えになった。さらに、骨格となる4本の太い柱は間伐材でない材木を別途に製材して充て

られた。コンクリートの基礎部分はそのま利用できたが、結果的には「改修」というより、「二代目の建設」であった。草川さんには随分難渋してもらい、年末の2010年12月23日によく完成した。

しかし工事費は膨れ上がった。「初代」の建設費は46万2630円だったが、「二代目」は58万4430円にのぼった。滑り台を金属製にとりかえ、廃棄木材の処分費もかかった。また、防腐処理を念入りにしてもらった。その費用も含まれた結果である。(当時の消費税5%も含む)

「第2代ドリームハウス」は改修から11年を経ているが、比較的健在である。しかし、まだ健在なうちに防腐を含む塗装工事を施しておいた方がよい、腐食が始まってからでは遅い。新年早々の1月9日に水洗工事が行われたが天候不順のため、塗装工事は2週間遅延し、1月30日によく完了した。自然の木材の色になるべく近く、美しく化粧直しされた。今回の費用は21万2000円を予定している。

あと10年、20年、子どもたちの夢を育てる楽しい大型遊具として、愛されてほしいものだ。

間伐材とは？ あいあいの保育環境を充実

森林の成長を促すため林業家たちは成長の遅れた樹の間引き＝間伐を繰り返す。間伐をしないと太陽光がじゅうぶん当たらず、風通しも悪くなる。山が荒れる。せっかく植樹し、10年、20年も育ててきた樹木だが、よい木材を出荷するためには育ちの悪い木の間伐(間引き)は不可欠な作業だ。林業を営む人たちは悲しみをこらえて間伐をする。親や祖父の代から何十年もかけて樹木を育て、やがて大きく育った樹木だけ出荷する。こうした営みを営々と続ける。

ところが、間伐で発生した間伐材は、ほとんど山に放置される。育ちが悪く不揃いな間伐材は建築用

材にはならない。人手をかけて山奥から出荷しても、値がつかない。赤字になる。しかし、もったいないことだ。間伐材を何か有効に使ってもらえたらありがたい。これが林業家たちの願いだという。

そんな話を開園の前、県議であった沢田たか子さんから聞いた。彼女の父・澤田純三さんは、高島市今津町の山奥で30町歩の山林を管理していた。そこで沢田林へトラックを走らせた。澤田さんの好意で、大量の間伐材をいただき、草川さんの作業場まで運んだ。

草川さんには間伐材を使った遊具づくりを依頼した。出来上がった遊具の第1号は「木馬」だった。まだ開園前の2000年10月ごろ、私の自宅に届いた試作品は素晴らしかった。すぐに大中小3台、計9台の製作を頼んだ。開園とともにこの木馬は子どもたちの大人気となった。21年たった今も、ビクともしないし、相変わらずの人気だ。保育用品会社にはドイツ製の木馬があるが、1台2万円以上する。草川さんは1台8000円で製作してくれた。保護者からの注文にも応えてもらった。

木馬のほかに、シーソーなどの遊具、ミザラなども次々と作ってもらった。開園2年目になると作品が大型化した。それがドリームハウスだった。こうなると大量の間伐材が必要になる。草川さんが沢田林まで直接出向いて、必要な材木を調達した。草川さんは澤田さんと懇意になり、澤田さんが山を案内して間伐材を積み込んでくれた。澤田さんは、すべての間伐材を無償で提供してくれた。有難い限りだった。

こうして、初代の「ドリームハウス」は、開園2年目の2002年9月に完成した。9月20日に完成式典が開かれ、子どもたちとともに完成を祝った。澤田さんと沢田県議も参加してくれた。初代園長が「ドリームハウス」と命名した。子どもたちの夢をふくらませる山小屋という思いだった。

まもなく若葉が芽吹く 「あいうの森」と「桑の森」

昨年の10月から「あいうの森」や「桑の森」の大々的な「散髪」が行われた。樹木の中には次第に巨木化・高木化するものがあり、そのうち剪定などが行えなくなるからである。今のうちに全面的な散髪をやっておこうと、業者の見積りを取ったら42万円もかかるとのこと。すると当園の土山耕作・保育支援員が「私がやります」と器用に樹に登り、高木を中心に大々的な剪定を行ってくれた。その結果、こんもりとした「緑のドーム」の面影は薄れ、坊主頭の樹も目立つ日当たりのよい森になった。緑を失うことは「あいうの森」にとって致命的ではあるが、間もなく春や初夏の訪れとともに、若い芽がすべての樹木に芽生え始め、「緑のドーム」が再生されるだろう。

外階段付近の「桑の森」も同様だろう。桑の木は成長が早いから、やがて新しい枝が伸び、若芽がいつせいに吹き出すに違いない。「桑の森」の桑の木は、2005年頃、当時の湖北町(現・長浜市)の佐野 稔さん宅から頂いてきたものだ。戦前は県内でも養蚕が盛んで、多くの農家が桑畑を持っていた。日本の養蚕が没落するとともに桑畑も桑の木もなくなったが、佐野さん宅には残っていた。快く譲っていただくことになり、ある雨の日、湖北町まで車を飛ばし、桑の木3本をもらってきた。3本の根を8本に引き裂き、外階段脇の築山に植えた。どの樹も立派に育ち、「桑の森」を形成するようになった。養蚕農家は食欲旺盛な蚕(かいこ)に毎日大量の桑の葉を与えなければならない。成長の早い桑の木は養蚕に適している。

今年の秋には、「桑の森」に濃い紫色の桑の実がふたたび実るだろう。こどもたちも楽しみだ。

「あいうの草創期の秘話」が **全面リニューアル** ホームページをご覧ください！

当園のホームページに掲載されてきた「あいうの草創期の秘話」は大津あいうの保育園が苦難と幸運の中で誕生した2001年前後の状況を開園10周年の2011年頃に記したもの。あいうの創建にまつわる「秘話」を12章のシリーズにまとめた。今般、これを全面的に加筆修正し、「リニューアル版・あいうの草創期の秘話」としてまとめ直した。これをホームページに再掲載したので、ぜひ、ご覧いただきたい。

パソコンやスマホで【大津あいあい保育園】と入力してHPを開き、左側を最下段まで進むと読める。